

## 生徒が主体的に課題を見出そうとする授業態度を育てる

### 1 テーマ設定の理由

昨年度の授業実践研究において、私は「思考を言語化する」ことに重点を置いた。自分なりの思考や意見を持てているのに、自信を持って言語化できるだけの根拠を持っていないがために「表現すること」に苦手意識を感じる生徒が多いという実態を見出したためである。そして、授業の流れやワークシートの作り方を工夫することで、どこを根拠に考え、言語化すればよいのかを分かりやすくすることを心がけた。その一方で、「何の目的で思考するのか。」や「なぜ考えを文章にするのか。」を生徒に伝える、あるいは生徒がはっきりと自覚できる授業とするために、生徒の生活に身近な課題が単元全体を貫くように設定し、関心を喚起する発問を投げかけられる授業づくりを今後の課題とした。本校の生徒の半分以上は就職を志望しており、就職試験の作文において「企業に自分をアピールすること」を目的とした文章を書けなければならない。就職できたならば、それ以後文章や資料を作る際には「〇〇に××を伝える」という目的をもち、それが達成された文章を作れなければならない。その力を養成する国語の授業を行うために、本テーマを設定した。

### 2 研究を進める上で配慮すべきこと

本テーマに基づいて研究を進める際、基礎的な読解が出来ていない生徒を置き去りにしないように配慮しなければならない。仮に、生徒が主体的に考察できるような支援に成功した授業だとしても、考察の中身が浅く、教材を読まなくとも思いつくようなものとなってしまうと、国語科として「深い学び」を達成したことにはならない。本校生の学力の実態を踏まえると、読み解く難しさが義務教育段階よりも増した高校国語の教材文で授業をする際は、語彙や文章の概要、小説の登場人物やあらすじ等をきちんと理解する段階を疎かにすると、上記の事態を招いてしまう。そのため、生徒の学習状況を注意深く観察し、立ち止まりながら確実な読解を達成しなければならない。また、学習活動にグループワークを取り入れ、生徒同士の繋がりあいを利用して「深い学び」の達成を狙っても、クラスメイトに対しても上手くコミュニケーションがとれなかったり、自分の考えを喋りあって終わったりして、学びが深まらないこともある。ゆえに、グループワークを抵抗無く行える人間関係の構築を支援することや、グループワークの進め方やゴールを細かく示す支援も行わなければならない。

### 3 1学期の取り組み

私は今年度、電気・情報システム科電気コース1年の正担任となった。また、教科担当として主に1年生のクラスで授業を行うこととなった。4月の授業開き以降、国語の一単位時間の授業がどのように進み、どのような態度で授業に臨めばよいかという点を、担当クラス全体に浸透させることに真っ先に取り組んだ。前述したように、読み解く難しが増した教材文の確実な読解を支援しなければ、「深い学び」を達成することはできない。読解の際に語彙のレベルで躓かないよう、教材文で使われている熟語やことわざ、慣用句の意味を単元の最初に確認した。小説を取り扱った際は最初に全文を通読し、すかさず登場人物の名前と人物像を把握させた。また、授業で使ったワークシートを必ずファイルに綴らせることや、毎週末に課される漢字の課題を必ず行わせること等、学習態度や学習習慣を定着させることも「深い学び」を達成する前段階として重要視した。これらは2学期以降も継続して指導していく。

同時に、クラスの学力の様相や人間関係といった「クラス全体の雰囲気」を掴むことに努めた。本校は全学年が8コースに分けられており、男女比や学力等でクラス間格差がはっきりと見られる。そのため、同じ単元を学習する場合でも発問や支援の仕方をクラスごとに工夫しなければならず、それらをより効果的にするために教師が「雰囲気」をなるべく早く掴まなければならなかった。2学期以降はこちらから「雰囲気」をつくることに挑戦し、クラスみんなで学習に向き合う「学習集団」を育てることに尽力したい。

授業の内容面で1学期に重きを置いて取り組んだことは、単なる穴埋めで終わらない思考を促す問いを積極的に設定し、出来るだけ多くの生徒が自身の思考を言葉で表現して答えられるように支援することである。この取り組みは[1]で述べた昨年度の授業実践研究テーマと同じものであるが、「深い学び」の達成に向けた第一段階として、生徒の読解を「深い読み」にまで到達させなければならず、そのためにはこの取り組みが必要である。ここで述べる「思考を促す問い」とは、教材文の広い範囲の記述から要点をまとめる問いや、直接的な記述には表れていない筆者の主張や登場人物の心情を推測・考察する問いを意味する。そして、この問いに自力で取り組むことが難しい、すなわち推測や考察を自力で立てられなかったり、考察を自身の言葉で表現できなかったりする生徒に対しては、机間巡視で教材文の手がかりとなる記述を確認したり、書き出しの言葉を例示したりといった支援を行っている。勿論、全ての生徒が答えを書けるまで待つことはできないため、「自分で書けなかったら、発表した人の答えをワークシートに書きなさい。」と指示して授業を進めることはよくある。しかし、この授業の進め方が常態化すると、「誰かの意見が板書されるまでは自分で考えずに待つ。」という授業態度を育ててしまう危険がある。ゆえに、机間巡視と個別の支援は積極的に行い、一単位時間で発表する生徒が固定化されないように注意している。本校では、1クラスを2講座に分けて国語の授業を行うことが多いため、個別の支援を充実させ易い環境がある。これも利用しながら、きめ細かな指導を今後も継続していく。

2学期以降の課題として、授業中の生徒同士の繋がり合いを形成して、生徒同士の「対話」を増やすことを挙げる。1学期中の取り組みを通して生徒個人やクラス全体の学力、人間関係を掴むことは進展したほか、教師と生徒の「対話」の構築も進めることができた。ここからは生徒同士を繋げて、生徒が共同して考察を深めたり評価し合ったりする学習活動を展開したい。勿論、[2]で述べたような深まりの無い繋がり合いにならないように、より一層丁寧な指導や支援が必要となってくるが、生徒が共同で学びあう関係をうまく作り上げられれば、教師からの支援を待たずに生徒同士で助け合える学習集団となる可能性がある。継続的な指導・支援を行うことで、2年生になった来春には生徒も教師もレベルアップした授業となるようにしたい。

#### 4 2学期の取り組み

2学期になると、生徒は高校生活のリズムをほぼ把握し、自分のペースと上手に擦り合わせながら毎日を過ごすようになった。生徒同士の人間関係も多様化・深化を見せ、1学期には同じ中学校出身者とばかり話していた生徒が、2学期から違う中学校出身者と話すようになったり、1学期と比べて仲をより深めたりする様子が見られた。教師である私も生徒のパーソナリティをほぼ把握することができ、授業内外における生徒指導を行いやすくなった。一方で、授業のワークシートをすぐに紛失したり、毎週末の漢字の課題をサボったり、授業中に私語を注意されたりする生徒も散見されるようになった。そういった「緩み」を許容してしまうとクラス全体の授業態度が緩んでしまうことに繋がるので、手綱を締めることに腐心した時期でもあった。

授業内容の面では、生徒同士の繋がり合いを利用して考えさせることが少しずつできるようになった。評論「里山物語」の導入の授業で、教科書に掲載されている風景写真から「自然の物」と「人工物」を見つけ出す学習活動を行った際には、私が「隣近所で相談してもいいですよ。」と声かけするだけで、生徒同士で協力して学習活動に取り組むようになった。特に2講座で展開されているクラスの場合、机の向きを変えてグループにしなくても授業が混乱しないため、「隣近所での相談」をしばしば容認している。

同時に、生徒個人がじっくり考えて取り組む時間も設けた。2学期になって初めて漢文の学習を行ったが、中学校範囲の返り点の復習及び新たな返り点の学習では、「相談」は認めず自力で返る順番を考えることを求めた。返り点という漢文学習の基礎において、前述した「誰かの答えが出るまで考えずに待つ。」態度を生徒がとってしまうと、その後につづく書き下しや現代語訳には手も足も出ない生徒を生み出してしまうことになる。授業中の机間指導や授業後の個別指導、さらには放課後の補習などで個人への支援も行ったが、1人でじっくり考える態度と力を養成することにも努めた。

## 5 3学期の取り組み～「羅生門」の授業実践を中心に～

3学期の1年生の国語総合において大きな比重を占めるのが芥川龍之介「羅生門」である。高校国語では定番の教材であるが、本校の生徒にとっては学ぶことの容易い教材ではないと私は感じている。ここから述べる3学期の取り組みについては、「羅生門」の授業実践にスポットを当て、昨年度の授業実践も踏まえながら述べていくとする。

### 5-1 昨年度の「羅生門」の授業実践とそこからの考察

昨年度は、機械・自動車科自動車コース1年生で「羅生門」の授業実践を行った。1クラスを2講座に分けた17人の生徒が対象であった。学力がかなり低い生徒も複数在籍するクラスであったが、授業への参加率は高く授業のしにくさを感じることはなかった。単元を進めるにあたり、全文を通読した後で『今昔物語集』の「羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人の話」を現代語訳で紹介し、その後で「羅生門」を詳しく読み解くという計画を立てた。「羅城門の…」を紹介することで、「主人公の男が羅生門の楼へ上ったところ、死体から髪を抜く老婆に出会い、彼女の着衣を奪って逃げる。」という大まかなストーリーを把握させ、内容読解をコンパクトかつ十分に進めるという意図があった。さらに「羅生門」と「羅城門の…」を比較することで、「羅生門」で下人の心情をより細かく、より鮮明に描き出そうとした作者の意図に気づかせたいと考えていた。

しかし、「羅城門の…」は授業の中で思ったように機能しなかった。原因は、一度の通読では「羅生門」のあらすじを理解できなかったため、「羅生門」と「羅城門の…」のテキスト比較を行うレベルにまで至らなかったためである。その結果、内容読解のために音読を繰り返さなければならず、単元を進めるのに想定以上の時間がかかってしまった。また、移り変わる下人の心情に接近するレベルにまで授業を深められず、かといってあらすじをクラス全体に理解させることもできなかった。この「羅生門」の授業は、楽しくも分かり易くもない失敗だったと自己評価せざるを得ない。

坂井高校でこの先も「羅生門」の授業を行うならば、大幅な授業改善をしなければならないと考えた私は、生徒が「羅生門」の何に躓いたのかを考察した。担当した17人以外の生徒の様子を知らなかったため必ずしも妥当とはいえないが、以下の4点が「羅生門」で躓くポイントであろう。

1. 平安時代の歴史的知識を持っていないため、小説の舞台をイメージしにくい。
2. 難解な語句に馴染んでいないため、文章を理解しにくい。
3. 難解な語句を多用した婉曲な表現に馴染んでいないため、場面や心情を理解しにくい。
4. 婉曲な表現が続くために「羅生門」の物語を「長い」と感じ、かつ物語で何が起こったのかを理解しにくい。

生徒が物語の中で移り変わる下人の心情を主体的に読み取ったり考えたりできるためには、この4点を克服出来るような手立てを私が講じなければならないと気づいた。

## 5-2 今年度の「羅生門」の授業実践

今年度の「羅生門」の単元では、先述した4点の躓くポイントを克服できるよう、全文を通読する前に『羅生門 まんがで読破』（イースト・プレス 2007・10）を生徒に読ませた。一度漫画を読ませるだけでも、躓くポイントのうち1と4の克服になる。ここで注意したのは、漫画化されることで生まれた教科書には無い場面を読ませないことである。通読の前に漫画を読ませる私の授業方法は、いわば物語に対する先入観を与えてしまうという方法だ。このとき教科書には無い場面を読ませてしまうと、生徒の読みを固定化させたり、ミスリードと評価せざるを得ない理解をさせたりしてしまう。漫画のストーリーのつながりは悪くなるが、「漫画がつながっていないところは、教科書を読んで勉強しよう。」と補って単元を進めた。なお、昨年度に使った「羅城門の…」については、作者について学習した際、ごく簡単に紹介する程度にとどめた。

一読した後のより詳しい内容読解の段階でも、生徒が考える手がかりとして漫画は活かされた。例えばテキストでは下人が暇を出された理由を、京都の町の〈衰微の小さな余波にほかならない〉と述べているが、生徒は「衰微」や「余波」という言葉に躓いてしまう（躓くポイントの2）。「衰微」について「勢力が衰えて弱くなるという意味です。」と補ったとしても、「京都の町が衰微し、その余波を受けて下人は暇を出された」という文章が何を意味するかを理解できない（躓くポイントの3）。ここで漫画に着目させると、〈衰微の小さな余波〉は「屋敷の財政が苦しくなる」という言葉に直されているため、下人は雇用先の財政難で暇を出されたということを理解できる。この他の場面でも、老婆が死体から髪を抜く様子や、下人が老婆を捕らえる様子などが漫画になっていることで、音読を繰り返さなくても生徒の理解を促進させられる。

さらに下人の心情の読み取りや、テキストに明記されていない心情を推測する際にも、繰り返し漫画を見直すことが役に立った。例えば、かつらにするために死体から髪の毛を抜いたという老婆の答えに対して〈下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した〉という場面がある。私はこの場面について「どうして平凡だと感じ、失望したのだろうか。」という発問を出した。この発問で生徒に求めたのは、老婆が女への個人的な愛憎や下人の常識では考え付かない目的のために髪を抜いているのではないか、という下人の想像が裏切られたために失望したという読解であるが、教科書だけを手がかりにすると、上記の下人の想像の部分を推測することが難しい。そこで私は、授業プリントに下人が呆れたような表情で〈「それだけのために……死人の髪を抜いたのか？」〉と言っている漫画の一コマを印刷した。すると、「老婆がもっと悪いことのために髪を抜いていると思った。」や「死んでいる女に恨みがあった。」等の下人の心情を推測した読解が生徒から出た。推測はできなくても漫画の一コマがあることで、老婆のかつらを作るという目的を平凡だと感じ、失望したという下人の心情を確実に理解するレベルまでは、多くの生徒が到達できた。この他にも、本文で述べられる下人の〈好奇心〉や

〈憎悪〉、〈勇氣〉といった心情表現を取り上げるとき、漫画で描かれた下人の表情等に着目させた上で考察・記述の時間を取ると、昨年度より多くの生徒が主体的に取り組んでいた。

### 5-3 今年度の「羅生門」授業実践を振り返って

漫画を活用した今年度の「羅生門」の授業は、昨年度より分かり易くできたと感じている。ストーリーや下人の心情の読み取りを助けたほか、災いで荒れ果てた平安京や羅生門のイメージを与えることができた。また、漫画が単発の小道具ではなく、単元を通して繰り返し見直す教材として機能したことも成果だと考えている。

一方で、単元の序盤に漫画を読ませてあらすじを把握させることを狙ったが、下人が追い剥ぎをする場面を漫画ではっきりと描いていないため、生徒がラストシーンの出来事を理解できなかった等の問題もあった。「漫画で見れば簡単に理解できるだろう。」という私の考えは軽率であったと反省しなければならない。また、漫画であらすじを把握させたため、〈sentimentalisme<sup>サンチマンタリズム</sup>〉のような作者独自の表現を授業で取り上げないまま単元を終えたり、音読を繰り返し行わなかったりした。漫画で理解することを是としながら、その理解をいかに教科書のテキストと繋げていくかを考えていく必要があるだろう。

## 6 まとめ

「生徒が主体的に課題を見出そうとする授業態度を育てる」というテーマで1年間の授業実践研究を行ったが、教師の支援と生徒の頑張りがバランスよく機能することが理想的な状態であると考えようになった。1人でも多くの生徒が授業を理解できるように、ヒントとなる声かけや個別指導、ペアワークやグループワークの設定、教材の工夫といった支援を行うことは当たり前のことであるが、「この先は生徒が頑張るところ」という基準を教師がはっきりと持っていなければならない。それを持つためには生徒個人のパーソナリティや学力、クラス全体の雰囲気や学力を把握しなければならない。何より、「生徒が頑張るところ」の基準を教師が簡単に譲らず、時には厳しさも見せながら頑張らせることも必要だ。そのように授業実践に臨むと、「どうすれば生徒が頑張りがやすいだろう。」と考えて支援の方法を探るようになり、支援と頑張りがバランスよく機能するようになっていこう。生徒によって有効な支援が異なるのは言うまでも無く、特に坂井高校はコースごとに学力や雰囲気が大きく変わるために、各コースで有効な支援を見出していかなければならない。来年度も試行錯誤は続くだろうが、これまでの自らの実践を振り返ることで支援しなければならない事柄や支援策のヒントを見つけ出し、生徒が頑張る授業を支えていきたい。